



特252

328

日獨文化交流の意義に就て

獨逸文化研究所

京都市左京區吉田東一條

始





持 252  
328



日獨文化交換の意義に就て







日獨文化交流の意義に就て



### 日獨文化交流の意義に就て

最近、我が國民の獨逸に對する關心が頗る強くなつて來たことは、我々日獨文化交流事業に携つてきた者としては甚だ喜ばしいことと言はねばなりません。今回、北支に突發した事變は我が政府の不擴大方針にも拘らず、遂に全支に波及し、時局に對する國民の覺悟は餘程の緊張と確乎不拔なものを必要とするに至つたことは、ここで述べるまでもないことであります。既に皇軍の威力は十二分に發揚せられ、北支に於ける敵の作戰根據地は大同を始め、保定、石家莊、滄州、德州等の要地は悉く我が手に歸し、上海戰線に於ける前線部隊の努力、海上艦船の支那船舶交通遮斷、陸海兩空軍の大膽無敵の行動、何れも見事な成果を收めつつあります。我が國



策は今や着々とその緒についてゐると申すべく、我が國民は大きな安堵を以て前途を望む次第であります。併しながら、依然として歐米諸國の政治的動向は甚だ複雑を極め、それら諸外國の利害關係、外交政策を考慮する時、支那事變の前途は遽かに樂觀を許さないものがあるのを思はねばなりません。國際聯盟などに於ける我が國の立場は、過ぐる滿洲事變當時に比較するならば幾分その不利を免かれ得たと言ふことが出来るとは言へ、最近、支那側の必死な宣傳が漸くその効果を現し來り、我が國の正義が殆んど誤解のなかに埋もれてしまつた觀があるのは甚だ遺憾であります。我が國としても愈々民間有力者を英米佛獨等の諸國へ國民使節として派遣する計畫を決定し、或は歐米に我が有力な宣傳機關を設けよとの議が一部有識者によつて説へられ始めたことは、當然の事と言ふべきであります。我が國民は國內經濟の基礎を鞏固にし、或はまた國民精神を作興し、強力な一致團結を以て銃後を憂なからしめると共に、國際間に於ける我が國の立場をも正々堂々主張すべきは率直

に主張し、荒唐無稽の宣傳による誤解を一掃し、皇軍の尊い血によつて得たところのものを飽くまで守りとほさねばなりません。我が國民は最後の一人と雖も、堅忍不拔の覺悟を以てこの一大非常時を乗り切る決意を要するのであります。

かかる國際的多難の局面に於て、ひとり獨逸は事變突發の冒頭から我が國への深い理解を示したのであります。最近獨逸の新聞雑誌を見ましても、よく我が國の立場と方針を理解し、爲にするところの無稽の作爲を排し、公正穩健の判斷を下して居るのは、洵に我々の感謝に耐へぬ次第であります。これには勿論、昨年十一月に成立を見た日獨防共協定のあることを忘れてはなりません。日獨防共協定成立當時は、我が國の輿論は一般にこれに對して冷淡無關心であり、政界、言論界等の有識指導者階級のなかにさへ一部公然と反對意見を發表する者がありました。然し、今に至つて日獨防共協定はその無言の威力を發揮したのであります。既に日獨防共協定を一層強化擴大するために、日獨同志會の如き民間團體の運動さへ行はれてゐる



のであります。かういふよき機会に、日獨の友好關係が一層緊密になることは、固より我々の衷心願ふところであります。我々は従前に倍する熱意を以て、獨逸文化の長所を研究し、そのよき理解者となりその親密な友となると同時に、一方また、我が國の文化と歴史の光輝ある本質を彼に傳へ、現在の獨逸を通じて歐米は言ふまでもなく廣く世界にその眞價を知らしめる最も適切な時期であることを確信するのであります。以上略述した内外の複雑錯綜した世界事情は益々我々のかかる決意を火のやうな熱度を以て鼓舞するのであります。

言ふまでもなく、獨逸文化研究所（京都）はその設立の趣旨から言つて直接政治や政策に左右される性質のものではありません。常にその眞摯謙讓な研究的良心を以て、平時も戦時と同じ緊張した覺悟を持し、不斷の努力を竭すべきことは、今更言をまたぬのであります。併し、今こそ我々はそのやうな平時の眞摯な努力を本當に力あるものにしたたいと熱望する次第であります。我々は安價な一時の興奮に浮か

されることを警めると共に、學的な研究良心の單つた仕事をこの重大な時期のさなかに日獨兩國国民に見せたいと、強く心に期するところがあります。ここに日獨文化交換の一般を概説し、最後に獨逸文化研究所（京都）の事業の一端を御紹介したいと思ふのも、日獨の緊密な政治的提携の背後には必ず兩國の眞摯な文化交流の實踐が推進力とならねばならぬこと、また熱心な有意義な兩國の文化交流による根柢ある理解のみが政治的協定をして眞實に強力なものたらしめることを繰返へし強調して置きたいとの微意に外ならぬのであります。

日本と獨逸が直接文化的交渉を持つたのは、さして古い出來事ではありません。徳川時代に日本が公けに外國と交渉を持つたのは和蘭人に限られてゐた故であります。併し、その頃既に和蘭東印度會社に職を奉じて來朝した獨逸人はあつたのであ



ります。一六三九年にブラウンといふ獨逸人は平戸に於て日本のために臼砲を鑄造したことがあり、その一門は今も遊就館に保存されてゐることでもあります。ケンペル、シーボルト等は、何れも和蘭東印度會社に招かれた醫者であります。この二人の獨逸人的な鋭い觀察は日本を初めて科學的に發見したものとまで言はれてゐます。ケンペルは一六九〇年に來朝した人であり、シーボルトは一八二三年長崎の出島へ來たのであります。シーボルトには日本に關する幾つかの有名な著作があり、就中「日本の動植物誌」の如きは甚だ見事な學問的勞作でありました。下つて一八六一年には日本とプロイセンの間に通商條約が結ばれて居ります。以後、各地の開港場に獨逸商館が營業を開始し、次第に今日の隆盛を見るに至つたことは申すまでもありません。ここで我々が注意したいのは、さうした通商的關係の土台の上に築かれた獨逸の學者、専門家の日本に残した足跡であります。勿論、個々の重要な學者とその残した事業を一つ一つ數へてみることは、非常な準備と調査を要する

ことであつて、差し當つて僅少な紙數でそれを盡くすことは出来ません。ただ重要な學科と事業の大體について概略を述べるだけで、我々は満足しなければならぬのを遺憾とします。

獨逸との學問的關係で直ぐ我々が思ひ浮べるのは醫學であります。明治初年、最初招聘されたのは主として英人の醫師であつたと言ふことです。後ち、獨逸の醫學者がそれに代つたのであります。即ち一八七一年、ドクトル・ミュレルとドクトル・ホフマンが來朝したのが、日本に於ける獨逸醫學の開拓者であつた譯です。續いてベルツ、スクリーバ等も來朝して、日本の若き學徒を指導しました。そして漸次大學卒業後數ヶ年獨逸に留學した日本學生が歸朝後大學教授に任せられ、獨逸人教授と入れ代つたのであります。日本の醫學は現在では歐米先進國にも劣らぬ、否、或る部門では既に歐米先進國を凌駕するまでの長足な進歩を遂げましたが、それを育て上げたこれら獨逸人教授の努力は忘れ得ぬものと言はねばなりません。



法律方面に於ける諸制度の如きも獨逸學者の協力と指導を必要としたことは、既に多くの人々の知るところであります。この方面は最初は佛蘭西の影響の下にあり刑法や警察制度等は佛蘭西人が起草したもので、佛蘭西の制度が多く取り入れられてゐたと言ひます。その後、獨逸の學者が招かれ、商法の起草者であると言はれるレーヌレル等が來朝しました。民事訴訟法等も獨逸法律學者の協力があつたと言ふことです。伊藤博文公が帝國憲法制定のため獨逸へ調査に赴かれたことは周知のことであり、モッセは大いに伊藤公を扶けたと言はれます。清浦奎吾伯も亦獨逸法律制度の研究に盡瘁せられ、現にライプチヒ大學名譽博士の稱號を擔つてゐられます。今尙我が國に於て獨逸法律學の研究が盛んなのは理由あることであります。

軍事方面、特に陸軍方面に於ける獨逸の寄せた好意も亦忘れることが出来ません。先に平戸で臼砲を鑄造したブラウンといふ獨逸人のことは述べましたが、紀州侯はケッペンといふ獨逸人を招いて和歌山で近代的軍隊の訓練を行つたことが記録に出

てゐます。徴兵制度が布かれた後も、プロイセンの軍事諸制度が日本のよき参考として役立つことは言ふまでもなく、その後も長い間、日獨の陸軍士官は相互に見學のため派遣されたのであります。獨逸の陸海軍軍人のなかによき日本の理解者のあるのは當然と言はねばなりません。

その他、音樂・哲學・教育・經濟學等の方面の獨逸から得た刺戟と示唆とは、簡単に説明することの出来ないものがあります。惹いては文藝を始め自然科学及び精神科學全般に獨逸から得たものは、實に莫大なものがあつたのであります。今日、我が國の文物及び諸制度が世界の強國として恥かしからぬまでに進歩發達し、その急激な向上が世界の耳目を驚かしてゐるのは、我が國民の民族的優秀性に依るとは言へ、一部は歐米諸先進國から學び取つた近代科學と精神文化によることも甚だ大きいのであります。そして獨逸が、英・米・佛・伊等の諸外國に優るとも劣らぬ協力と援助を我が國に與へたことは、何人も否定出来ないところであります。嘗



つて我々日本人が先輩として、教師として選んだ獨逸は、十分我々の期待に應へてくれたと言ふことが出来るのであります。

この日獨兩國の友好關係は最近に至つて更に親密の度を増したと考へられます。大正十五年にはベルリンに日本協會が設立されてゐます。これは獨逸政府の經費補助によつて、獨逸國內の各研究所・官廳等と連絡を取り種々の材料を蒐集して日本より來訪する研究者のために便宜を圖り、同時に日本の學術制度に關係する文献を蒐集して獨逸の日本研究者に種々の便宜を與へようとするものであります。昭和二年には東京に日獨文化協會が設立されました。我が國の獨逸事情研究者に多くの便宜を圖ると共に、獨逸から來朝する日本研究者に調査研究の便宜を與へて、日獨文化の連絡協同に協力しようとするのであります。ベルリンの日本協會に對應するものと言ふべきでありませう。我々の獨逸文化研究所（京都）はそれに續いて昭和九年に開設されました。既に京都には昭和六年ゲーテ百年祭を記念して創設された日

本ゲーテ協會があり、ゲーテを中心として獨逸文化一般の研究と普及に努めてゐたのであります。また京都帝國大學とライプチヒ大學との間に交換學生の制度が行はれ、日獨文化交換の事業が次第に活潑になつてゐたことも述べて置かねばなりません。獨逸文化研究所（京都）は京都に於けるそれらの事業と内面的な聯絡と接觸を保ちながら、一層廣い意味の獨逸文化に關する智識の増進普及を目的として生れたものであります。同時にまた獨逸を通じて日本の學術、文學、美術、風俗、産業等を廣く海外に紹介する意圖であります。嘗つて日獨文化交換の事業は殆んど個々の學者、研究家の個人的な仕事として行はれて來たのであります。最近ではそれが非常に組織化され、一つの團體の事業として、且團體相互の連絡と接觸によつて全面的に行はれてゐることが判るのであります。最近獨逸政府の厚意により日本を訪れたシュブランゲル教授は各都市、各大學に於て有益な學術講演を行つて我々に深い感銘を與へました。或は音樂家ケンブ博士が音樂使節として日本を訪れたこと、



ファンク博士が遠く日本に来て日獨協同映畫を制作したこと、日獨文化協會が貴重な獨逸版畫を東京、京都で展覽したこと、最近日本國實展を獨逸において開催するため國立博物館長キュンメル博士がわざわざ來朝したこと、近くクラム、ヘンケル等の庭球選手が來朝しようとしてゐること、また一方日本の碁が非常に獨逸で興味を持たれてゐること等、これらが直接一般民衆と接觸する仕事であるだけに、我々の見落してはならぬことだと思ひます。

我々は獨逸人の日本研究のことも述べなければなりません。ケンベル、シーボルトのことは既に一言觸れて置きましたが、近年ではフローレンツ博士が幾つかの日本古典を翻譯し、日本文學史等も書いてゐます。ランゲ教授はよく獨逸人に用ひられる日本語の教科書を著しました。シャルル・シュミット博士は秀れた語學者であり、よき日本の理解者でもあります。グンデルト博士は能樂の研究や日本文學史、日本宗教史等の著作を發表してゐます。獨逸に於ける日本研究は近年殊に甚だ盛ん

であると言ふことが出来ませう。日本古典の翻譯も種々のものが出版され、神皇正統記も最近獨逸譯が出来ました。ヘルンの著書や岡倉覺三の「茶の本」もよく獨逸人の間に讀まれたものであります。日本人自身が獨逸語で書いた書物も既に何冊か行はれてゐますし、ベルリン、ライプチヒ、ハンブルク、ボン、ミュンヘン等の主要な大學には日本學の講座が設けられてゐるのであります。併し、我々日本人の獨逸研究に比較するならば、まだまだ獨逸の日本研究は盛んにならねばなりません。我々も出来るだけそれに有效な協力を拂はねばならぬのであります。獨逸に於ける日本研究は漸やくその緒についたと言ふべきところでありませう。今が最も大切な時期であるとも言へるのであります。

獨逸文化研究所（京都）はこの種のあらゆる事業によき寄與をなすことを念とし



ます。設立日尙淺く、未だ殆んど人に語るべき業績はありませんが、各種の集會や講演によつて日獨文化交流に意を注いで來たことは言ふまでもありません。更にまた獨逸文化研究所講習部に於ては、既に晝夜各四クラス、合計八クラスを有し、ここで獨逸語を學修した講習生は別表の示す如く、延人員一、一五〇名の多數に上つてゐるのであります。

獨逸文化研究所講習部聽講生數

期別	年度	昭和九年度	昭和十年度	昭和十一年度	昭和十二年度
春 期 (四月—七月)		×	一八九	一八七	一八九

計	秋 期 (九月—十二月)	冬 期 (一月—三月)	計
	一〇七	一〇七 (十一月開設)	
一〇七	五七	七二	三五一
三五一	一〇四	一三三	三二二 (十月十一日現在)
三二二 (十月十一日現在)			

一方、日本文化を獨逸に傳へるためには獨逸文化研究所(京都)主事トラウツ博士の手によつて、日本關係書目索引の編纂が進められ、近々その出版に至る豫定であります。また、日獨青年學徒數人の協力によつて西田直二郎教授著「日本文化史序説」の獨逸譯もその大半の翻譯を完成し、やがて出版される運びになつてゐます。



近時、ナチス獨逸の文物制度に對する我々の認識が甚だ不十分であることは、獨逸人のみならず獨逸の現状を知り日本の將來を考へる有識者の大いに遺憾としてゐるところであります。我々はその缺陷を可及的速かに補ふと共に、我が國文化への獨逸人の認識を明確完全なものにしたいと考へて居ります。我々はこの微力な仕事の日獨兩國間の眞實な友好の土台になることを切に願ふものであります。

二〇〇	三〇〇	四〇〇	五〇〇	六〇〇	七〇〇	八〇〇	九〇〇	一〇〇〇
一〇〇	二〇〇	三〇〇	四〇〇	五〇〇	六〇〇	七〇〇	八〇〇	九〇〇
一〇〇	二〇〇	三〇〇	四〇〇	五〇〇	六〇〇	七〇〇	八〇〇	九〇〇
一〇〇	二〇〇	三〇〇	四〇〇	五〇〇	六〇〇	七〇〇	八〇〇	九〇〇
一〇〇	二〇〇	三〇〇	四〇〇	五〇〇	六〇〇	七〇〇	八〇〇	九〇〇
一〇〇	二〇〇	三〇〇	四〇〇	五〇〇	六〇〇	七〇〇	八〇〇	九〇〇
一〇〇	二〇〇	三〇〇	四〇〇	五〇〇	六〇〇	七〇〇	八〇〇	九〇〇
一〇〇	二〇〇	三〇〇	四〇〇	五〇〇	六〇〇	七〇〇	八〇〇	九〇〇
一〇〇	二〇〇	三〇〇	四〇〇	五〇〇	六〇〇	七〇〇	八〇〇	九〇〇
一〇〇	二〇〇	三〇〇	四〇〇	五〇〇	六〇〇	七〇〇	八〇〇	九〇〇

昭和十二年十月二十日印刷  
昭和十二年十月廿八日發行

【非賣】

編輯者 森 吉太郎  
發行所 獨逸文化研究所  
印刷者 尾 駒立太郎



終

